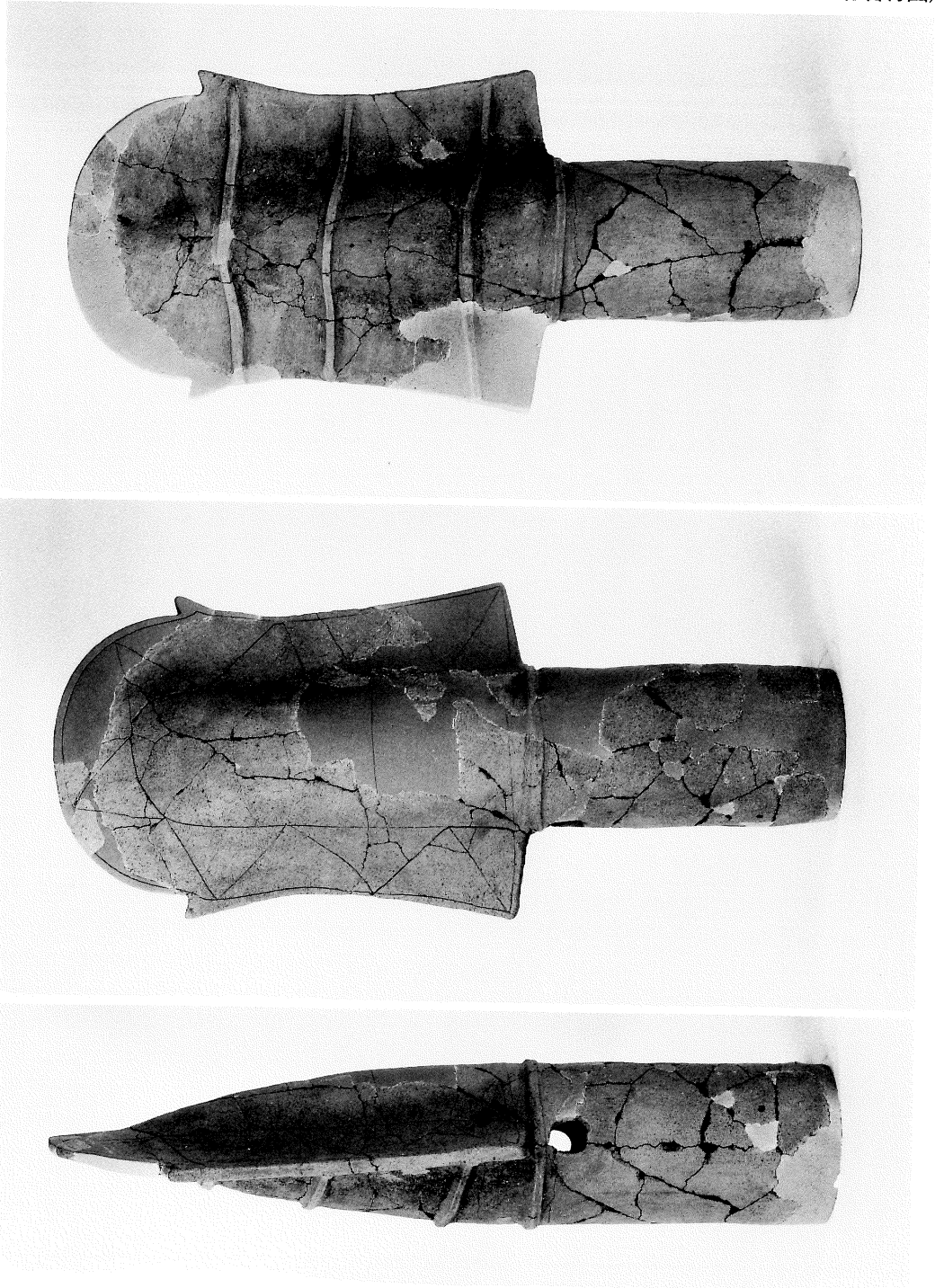


研 究 紀 要

第 9 号

1 9 9 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



小前田2号墳出土盾形埴輪

目 次

序

〈論文〉

若宮遺跡出土土器群の再検討 宮崎朝雄 金子直行…… 1
—静岡県東部における押型文系土器群の出現と展開—

将監塚遺跡・古井戸遺跡における
羽状縄紋を有する加曾利E式土器 橋本 勉…… 27
—集落と土器研究の一視点—

土偶の破損 濱野美代子…… 43

鍛冶谷・新田口遺跡出土土器の分析—前篇— 福田 聖…… 59

古墳時代馬小考 山川 守男……103

出現期模倣坏の検討（一） 大屋道則 中村倉司……119
—岡部町地神祇遺跡A地点資料による検討—

掘立柱建物の機能と構造 昼間 孝志……129
—埼玉・群馬県の集落遺跡の例を中心にして—

郡家造営事始め 田中 広明……141

板碑の廃棄に関する基礎的検討（一） 宮瀧 交二……167
—埼玉県内における井戸跡出土の板碑をめぐって—

〈資料紹介〉

小前田2号墳出土の盾形埴輪 瀧瀬 芳之……177

古墳時代馬小考

山 川 守 男

要約 全国的に見て古墳時代馬の最も多く集中する河内には、記紀の記述によって「河内の馬飼」が存在していたことが知られており、伝承や出土遺物などから、5世紀後半以降渡来系の人々がその仕事にあたり牧を経営していたと考えられている。東国で比較的資料に恵まれている信濃と上毛野でも馬歯馬骨出土遺跡の周辺を探ると、朝鮮半島からの渡来系要素の色濃い遺物等を見出すことができ、なおかつ有力首長の大型前方後円墳や居館と近接していることが浮き彫りにされる。

近年、北武蔵（埼玉県）の古墳時代後期の3遺跡から馬歯馬骨が出土した。渡来系要素・有力首長との関係という2点が古墳時代の馬飼に共通する要素だとすると、北武蔵北部の妻沼低地での馬歯馬骨出土遺跡は、程度の差こそあれ渡来系要素の見られる地域にあり、時期的にも埼玉古墳群の隆興と歩調を同じにすることから、妻沼低地が埼玉政権によって掌握された馬飼の存在した地域である可能性が大きい。

1. はじめに

遺跡の発掘調査で、その調査対象とされるのはほとんどの場合人間の生活痕跡である。ゆえに、調査で得られた成果の大部分は人間に係わるものであるが、その成果から人間の存在を取り除いてみると、人間を取り巻いていた動植物や自然環境が浮かび上がってくる。「取り巻くもの」は時代によって変化を見せるが、とりわけ古墳時代以降の遺跡においては馬に関係する遺物・遺構が筆頭にあげられよう。馬の存在については、縄文時代の貝塚から出土したとされる馬骨⁽¹⁾や『魏志倭人伝』に見られる「牛馬無し」の記述などから、日本にはいつごろから馬がいたのか、家畜化されたのはいつごろからかという解釈が分かれてきている⁽²⁾。

遺跡の調査成果として古墳時代、特に5世紀以降は古墳に馬具が副葬され、馬形埴輪が樹立されるようになるということは究めて客観的な事実である。これらをもって日本に乗馬の風習が定着していったと考えられるのと同時に、研究者のみならず若きは小中学生にいたるまでが知る歴史上の常識となっている。副葬品としての馬具や馬形埴輪が古墳という当時の社会要素の一部から出土する無機物であるのに対して、最近の調査では集落跡やその周辺から有機物である馬歯馬骨が検出される例が増加しつつあり、その分析や解釈もすすめられるようになった。

近年、北武蔵においても古墳時代の3遺跡で馬歯馬骨が検出された。そのうち1遺跡の調査に筆者も携わり、馬歯馬骨の出土が何を意味するのかを考えるうちに、当該期の馬歯馬骨資料は全国的に見てもあまり類例の多いものではないことを知った⁽³⁾。本稿はこれまで古墳出土の馬具を中心にすすめられてきた感のある馬についての研究に、馬の実在を示す馬歯馬骨をあわせて古墳時代の馬の存在意義について考えてみたい。

2. 各地域の古墳時代馬 —— 河内・信濃・上毛野

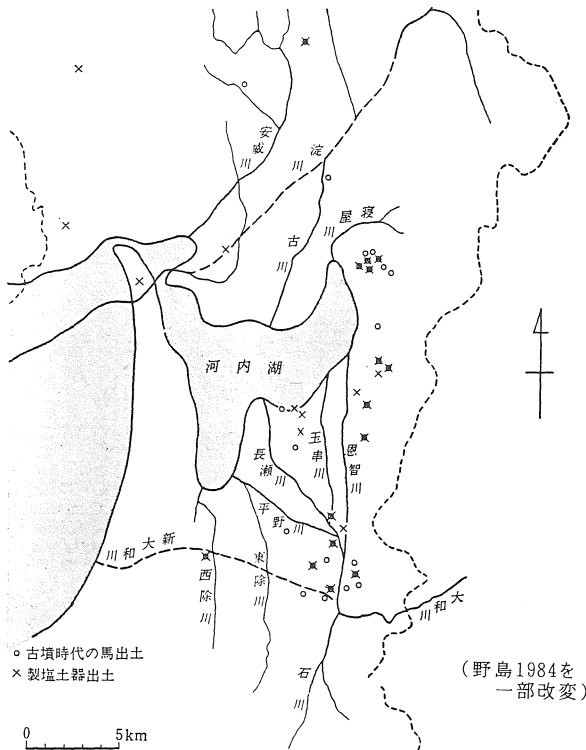
古墳時代に属する馬歯馬骨の出土例は全国的に均等に見られるわけではなく、大阪府の旧河内地域に圧倒的に多いほかは、都府県単位に見ても数例ずつであろう。ここでは河内と、東国のなかでも比較的古代馬研究の進んでいる信濃と上毛野の各地域を取り上げ、それぞれの地域で現在までに成されている研究成果を概観していくことにする。

(1) 河内の古墳時代馬

河内地域には古墳時代の馬歯馬骨を出土する遺跡が集中しているが、これについては野島稔氏の概説があり(野島1984)、これをもとにして状況をまとめてみたい。出土が集中するのは生駒山地と旧河内湖とに東西を、また大和川と淀川とに南北をそれぞれ画された地域、すなわち現在の四條畷・東大阪・八尾・柏原の各市を中心とした地域である。野島氏によれば、馬歯馬骨を出土する遺跡は5世紀後半から6世紀初めになると増加し、大別して古墳内の馬埋葬と古墳以外の馬埋葬とがある。前者の事例として、四條畷市清滝2号墳周溝内の土壇状の窪みから出土した1頭分の馬歯(野島1980)や、四條畷町D号墳の横穴式石室内から人骨や牛歯とともに出土した馬歯があげられている。一方後者の事例は多く、四條畷市更良岡山1号墳周溝外の土壇より出土した6世紀中ごろの馬歯(野島1981)、高槻市郡家川西遺跡の集落内土壇墓から出土した7世紀中ごろの馬歯、茨木市郡遺跡の土壇墓からの馬歯、四條畷市奈良井遺跡の5世紀後半から6世紀中ごろに営まれた隅丸方形の祭祀遺構

を取り囲む大溝内から出土した6頭以上の馬歯馬骨があげられている。奈良井遺跡での出土状況は究めて祭祀的な様相を呈しており、うち1頭は板を敷いた上に横位状態で出土し、他の馬歯もあわせた同一層中からは須恵器・土師器のほか、手捏土器・人形や動物形の土製品・滑石製白玉等が出土した。その後、同市南野米崎遺跡や中野遺跡(野島1986・1988)などでも溝や井戸から馬歯の出土が見られ、滑石製品を伴う場合が多いことからやはり祭祀跡と見られている。傾向として、埋葬あるいは祭祀的な出土状況がほとんどであり、伴出遺物は滑石製品・韓式系土器・製塩土器が多いとされている。

この地域に馬歯馬骨の出土が集中するのは「河内の馬飼」との関係で考えられており、古くは『日本書紀』の次の各条に河内の馬飼の名が登場する。履中天皇



第1図 河内・古墳時代馬出土遺跡の分布

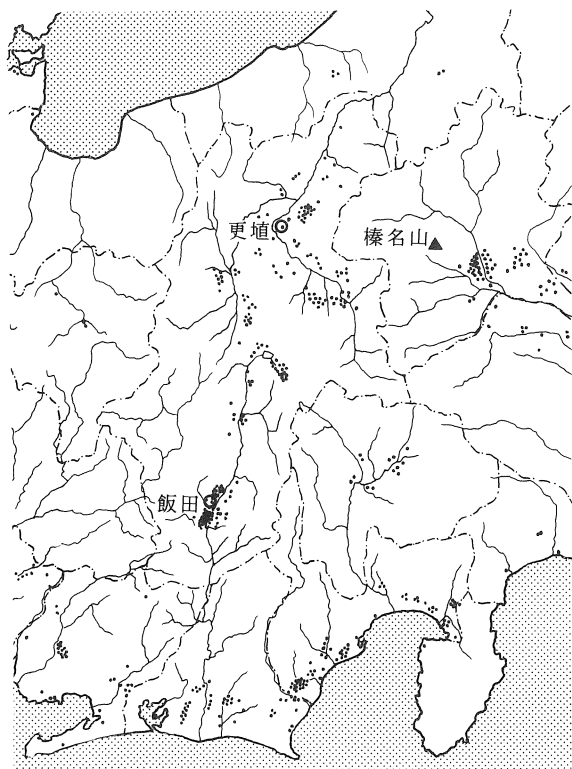
5年9月の条の河内馬飼部、継体天皇元年正月の条の河内馬飼首荒籠^{あらこ}、同23年4月の条の河内馬飼首御狩^{みかり}、同24年9月の条の河内母樹^{おものきの}馬飼首御狩、欽明天皇22年の条の河内馬飼首押勝、天武天皇12年9月の条の川内馬飼造、同10年の条の娑羅羅馬飼造^{さららの}、菟野馬飼造^{うのの}がそれぞれそうである。娑羅羅馬飼造、菟野馬飼造は讚良郡に關係する氏族と見られ、四條畷市の奈良井遺跡や中野遺跡などはこの讚良郡内に位置し、河内湖と生駒山麓さらに河川によって区切られた地形が馬の飼育に適していたとみられている。製塩土器の出土は『厩牧令』の規定にも見られるように馬の飼育には膨大な量の塩を必要とした結果のあらわれだろうと見られ、これも馬の飼育を裏付けている。

河内の馬飼の成立については佐伯有清氏が述べている(佐伯1974)。要約すると『日本書紀』の有名な雄略天皇9年7月の条に見える月夜の換馬の記事は、河内国に居住していた田辺氏の家伝であり、この田辺氏は朝鮮系の氏族と考えられる。応神天皇15年8月の条には、百済の王が阿直伎^{あぢき}を遣わして良馬2匹を貢り彼に飼育をさせた。また彼によって優れた博士として百済の王仁が推され、そのとき王仁を迎えに百済に遣わされたのが田辺氏の祖先である荒田別^{あらかわけ}であったと記されている。さらに王仁の後裔氏族の武生連は、天平神護元年(756)以前には馬毗登^{うまのひと}の氏姓を称して河内国古市郡を本貫としていたというのである。すなわち、文献に登場する馬に係わる氏族はその系譜を朝鮮半島に求められるということになる。先述の讚良郡の馬飼は、その系譜が直接朝鮮半島につながらないが同様な由来をもつ氏族であろうし、馬齒馬骨に伴って出土する韓式系土器はその証拠となるべきものであろう。

最近では5世紀代に馬は大王権によって各地の首長に配布もされ、馬の大量生産のためには高度な技術と牧その他の要素が必要とされたという見解が出されている⁽⁴⁾。上述のように河内の馬飼成立の背景には当時の政治的状況と地形的な要因が大きくはたらいていたのである。

(2) 信濃の古墳時代馬

信濃では数遺跡で古墳時代の馬齒馬骨が出土しているが、ここでは筆者が内容を知り得た飯田市(伊那谷)と更埴市(善光寺平)の例について見ることにする。飯田市新井原古墳群では、帆立貝型前方後円墳の12号墳の周溝外にこの古墳に伴うと見られる4号土壇が存在し、馬1体が埋葬されていた(小林・今村1983)。鉄地金銅張りのf字形鏡板付轡や剣菱形杏葉などが装着され、B種横ハケの円筒埴輪をもつ12号墳同様、5世紀後半のものと思われる。新井原2号墳も5世紀後半の径30mを計る円墳であるが⁽⁶⁾、周溝外側立ち上がり部に馬齒を伴う土壇が3基隣接して検出されている(下伊那教育会1991)。更埴市生仁遺跡では集落内の祭祀遺構から馬の両前足の骨が検出されている(佐藤1989)。土器と犬の頭骨や鹿の顎骨などの獣骨に混じっての出土であり、5世紀後半のものと思われる。同市五輪堂遺跡では、新井原4号土壇と同様に土壇内から馬1体分が出土しているが、6世紀中葉のものであり集落内であること、馬具を伴わないことなどで新井原例と様相を異にしている(矢島1978)。この他、古墳時代後期(7世紀前半)から奈良・平安時代とやや時代は下るが、集落の竪穴住居内から馬齒馬骨が出土する例が見られるのであげておきたい。浅間山麓の佐久市・小諸市・御代田町にかけて広がる鑄師屋遺跡群であるが、ここは奈良時代に急激に拡大した計画的な村落と考えられており、奈良・平安時代の竪穴住居跡29軒から馬骨が出土している(堤1989)。



第2図 馬具副葬古墳の分布(岡安1986に基づく)

信濃の古代馬に係わる研究には、現在大きく2つの視点がある。1つは全国最多を誇る古墳出土の馬具についてであり、もう1つは牧についてである。岡安光彦氏は馬具分布の分析から、馬具副葬古墳の被葬者に天皇直属の親衛軍である東国舎人を想定している。その身分、集団の人々は日常は牧を駆け、戦時には騎馬兵となる二つの性格を持っていたと考えており、最も馬具副葬古墳の多い下伊那地方をはじめ長野の大室や穂高の牧など、牧の地名と馬具副葬古墳の分布とが一致する場合も多いという(岡安1986)。このような条件のもとで、下伊那地方の新井原古墳群例や大室に近い生仁・五輪堂各遺跡例などは、馬具以外でそれぞれの地方の集団の特性を表す好資料となる。すなわち6世紀末から7世紀前半に馬具副葬古墳が急増することから、この時期

に東国舎人の騎馬兵力が急成長したと見られているが、新井原古墳群と生仁遺跡の例によって、それに先立つ5世紀後半には両地域に既に馬が存在したことが明らかになり、さらに古墳群内への馬の殉葬や集落内での祭祀への使用など馬飼の存在した河内の様相に類似点が見出せる。河内の馬飼のように渡来系を示唆するような伝承や、多量の韓式系土器のような遺物は見られないが、生仁遺跡や五輪堂遺跡の所在する善光寺平南部には同じく5世紀後半には成立し、500基近い積石塚を擁する大室古墳群が存在し、この古墳群を中心に渡来系の人々の存在が推定されている(大塚1986、桐原1989)。すなわち朝鮮半島に類例の多く見られる積石塚とその内部主体である合掌形石室に渡来系の要素を色濃く示し、同地域の土口將軍塚古墳の埴輪に見られる格子目叩き(山根他1987)や城内遺跡出土の陶質土器(木下1985)などの存在もこれを補強する。そして律令期にはこの地域に御牧である大室牧が置かれたことから、それ以前からの馬の飼育の可能性を考えあわせると、河内と同様の渡来系馬飼集団が信濃にもいたことが予想される。

一方、鑄師屋遺跡群の住居内や土壇内から出土した馬歯馬骨の背景には、律令期の長倉牧と塩野牧に近接するという立地に加えて、この地域を東山道が通過し長倉駅が存在していたという歴史的事実がある。この遺跡群の集落は牧か駅のいずれかの経営にあたり、その関係で馬歯馬骨の出土が見られるという見解がなされている(堤1989)。廃棄後の住居の窪地に入りこんだ状況は前述の古墳時代の遺跡とは異なるが、馬に係わる施設や人々との関係で捉えることができるという共通点を見出すことができる。

古墳時代には牧経営に結びつくと考えられる馬具副葬古墳が多数存在し、奈良・平安時代においても16の御牧が置かれ、東山道とそれに伴う15駅が設置された信濃ではここで取り上げた下伊那の飯田市周辺や善光寺平南部の更埴市周辺あるいは浅間山南麓の鑄師屋遺跡群のような馬歯馬骨の在り方がほかにも検出される可能性が十分あると考えられる。

(3) 上毛野の古墳時代馬

上毛野地域で現在のところ知られている古墳時代馬が出土した遺跡は、榛名山東南麓の群馬町に所在する三ツ寺Ⅰ遺跡、三ツ寺Ⅱ遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下「中間地域」と略す）の3遺跡で、いずれも詳細な分析がなされている。

三ツ寺Ⅰ遺跡は周知の通り東国を代表する豪族居館跡であるが、その概形は東西南北にそれぞれコーナーを向ける一辺約86mの方形で、幅32~40mの濠が取り囲む(下城1988)。馬歯馬骨はこの濠の北コーナー部分(北濠)から人骨、牛骨とともに出土している。館の消長は大きく4時期に捉えられ、第Ⅰ期：館築造期・小改築期、第Ⅱ期：大改築期、第Ⅲ期：衰退期、第Ⅳ期：館廃絶期に分けられている。各期の様相についてここでは省略するが、第Ⅱ期終焉の契機を榛名山のFA降下に、また第Ⅳ期館廃絶の契機を榛名山のFP土石流に求めている。馬歯馬骨の詳細な出土状況は報告されていないが、宮崎重雄氏の獣骨類分析報告中では「FP砂礫層」出土とされ、下城氏のまとめでは館廃絶後6世紀後半には北濠取水部周辺において坏類を中心とした多量の土器を献納する祭祀行為が存続し、遺物の中には牛馬骨が含まれているとしている。

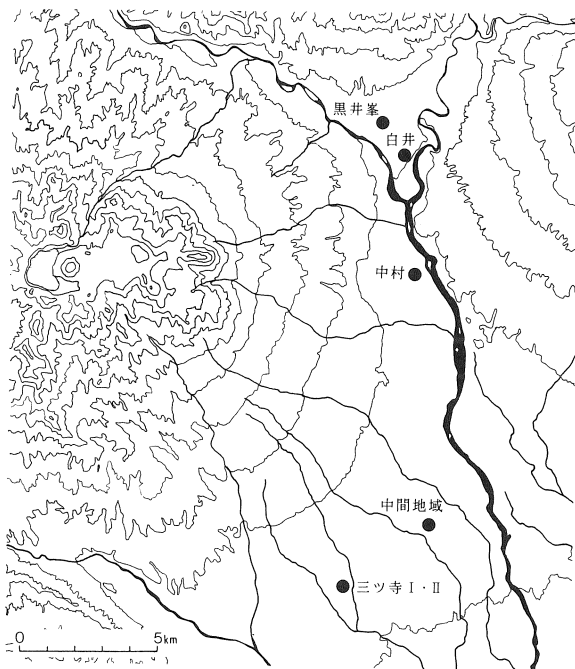
三ツ寺Ⅱ遺跡はⅠ遺跡の北側に隣接する南北に長い舌状台地に営まれた集落跡である(関他1991)。上越新幹線の敷地幅の調査で6世紀代の竪穴住居が108軒検出され、そのうち集落南端の6号、15号、17号、22号の4軒の住居から馬歯馬骨が出土している。15号住居のものは一塊になった下顎骨で覆土中からの出土であり、17号住居のものはカマド内から出土した焼けた肋骨である。時期的には17号住居が6世紀後半である以外、他の3軒は6世紀前半のものである。

三ツ寺Ⅰ・Ⅱ遺跡はそれぞれ居館と集落というように性格の違いはあるが、位置的にも時期的にも両者が有機的に併存していたことは明らかである。両遺跡の近接部からそれぞれ馬歯馬骨が出土したことがそのあらわれであろう。Ⅰ遺跡の馬歯馬骨は祭祀に係わるものと見られるとともに、宮崎氏によって「当時としてはかなりの大きな馬で…(略)…居館居住者あるいはその関係者により乗用又は兵馬として飼養されていたものであろう」と考えられている(宮崎1988)。Ⅱ遺跡の古墳時代馬も推定体高(132.6±1.6cm)より、同様に居館に属する関係者の飼養した馬と見られ、同遺跡の平安時代から中世に属する馬の大きな体高からも、祖先より伝来の卓越した馬飼養技術を持ったⅠ遺跡の後裔の存在が想定されている(大江1991)。いずれにしても、Ⅰ遺跡北濠における館廃絶後の祭祀はⅡ遺跡の人々が行なったものと見ることができ、逆にⅡ遺跡において6世紀後半だけでなく6世紀前半の住居からも馬歯馬骨の出土を見たことは、Ⅰ遺跡と馬との係わりがこの時期まで上がるということもできる。

上野国分僧寺と尼寺との中間地域では、2寺の中間を南北に貫通す、道路幅の調査によって古墳時代後期から奈良・平安時代にわたる大集落が検出され、多量の馬歯馬骨も出土して中世に属する

ものも合わせれば600点余になるという（木津他1990）。このうち古墳時代に属する馬歯馬骨は、2軒の竪穴住居の覆土中から出土して居る。南端と北端を河川の開析によって区切られている遺跡群で、馬歯馬骨が出土した2軒のうちA区59号住居は最南端に位置する6世紀後半から7世紀前半にかけてのものだが、G区14号住居は北半に位置する7世紀末のものであり、時期がやや前後している。

中間地域は三ツ寺I・II遺跡から直線距離で約3.5km離れているが、さらに北東に約2km離れた榛名山麓に位置する総社古墳群とあわせてその性格が論じられている（木津1988）。すなわち、FA降下直後から7世紀まで大型古墳が築造された同古墳群の周辺は、同じくFA降下によって打撃を受け廃絶を余儀なくされた三ツ寺居館の移築先であり、その主は8世紀中頃以降には国分寺造営に深く係わった上毛野君氏であったと推定されている。この総社古墳群及び上毛野君居館推定域に近接する中間地域の遺跡群も5世紀代にはほとんど遺構が見られず、6世紀以降の所産である。ゆえに中間地域における馬歯馬骨の存在は、三ツ寺I遺跡（居館）に対するII遺跡（近接集落）と同様の関係で上毛野君居館推定域に結びつけることも可能であろう。これは大江氏の「130cm及び135cmという体高は中間地域出土の馬歯馬骨を有する馬達の中では大きい馬に属しており、上毛野の中核地域で飼育された馬にふさわしい優れた馬であった」（大江他1990）という所見によって補強されようか。さらに大江氏はこの地域で検出された172点にのぼる平安時代の馬歯馬骨について言及している



第3図 榛名山麓・古墳時代馬関連遺跡の分布

が、要約すると次のようなものである。群馬県内で平安時代の馬歯馬骨を多く出土している他の3遺跡（日高、田端、下東西）に比べて、中間地域では馬の平均死亡年齢が若年死を示している。これは戦闘その他の公用の徴発によって壮令馬以上の馬がいなくなった結果であり、その要因として上野国府が8～9世紀の蝦夷経営の兵馬供給中枢となっていたことから、隣接する中間地域の集落も自ら兵馬供給を全面的に担って馬を飼育していたという歴史的背景を唱えている。

以上のように上毛野では、三ツ寺II遺跡や中間地域など居館との関係で馬の存在意義が捉えられている。さらに中間地域の平安時代馬も上野国府との有機的な

関連が推定されており、上毛野では各時代とも中核部周辺に馬の出土が見られるという必然性を見出せるのである。

一方、河内と信濃で見られた渡来系の要素であるが、田口一郎氏は榛名山東南麓地帯で5世紀後半の叩き技法をもつ朝鮮三国系軟質土器（韓式系土器）の出土が11遺跡で確認できることから渡来人集団の進出を想定している。また6世紀前半までの平底鉢をはじめとする朝鮮三国系軟質土器の

分布は、積石塚方墳が集中する渋川市周辺と井野川・烏川流域とに大別され、さらに後者は5～6世紀に大型前方後円墳が継起的に築造された綿貫・八幡・保渡田の3古墳群周辺にわかれるということであるが(田口1988)、このうち保渡田古墳群は、三ツ寺Ⅰ・Ⅱ遺跡との密接な関係が考えられている。よって三ツ寺Ⅱ遺跡や中間地域から、直接渡来系要素をもつ遺物の出土は見えていないが、上毛野における榛名山東南麓は河内や信濃と同様に馬飼と渡来系要素がオーバーラップする地域と言えよう。そして6世紀前半段階には馬の飼育が行なわれていたと見られるが、韓式系土器の存在から5世紀後半まで遡る可能性もある。

本項では河内・信濃・上毛野の3地域における古墳時代馬の在り方を既説を通して概観してきたが、ここには2つの大きな共通点が見出せそうである。

第1点は各地域に見られる渡来系要素である。河内の馬飼の地における伝承や馬歯馬骨に伴う韓式土器の出土が最も端的な例であると言えるが、信濃や上毛野では渡来系の遺物が馬歯馬骨に直接伴う例はない。しかし信濃の善光寺平南部や上毛野の榛名山東南麓のように、馬歯馬骨が出土する地域にはこの要素を多数探し求めることができ、規模の大小はあっても河内と類似した様相を呈していたことは十分に予想できる。

第2点は馬歯馬骨の出土する地域と首長層との結びつきである。先に述べたように河内の馬飼や牧の存在が大王の支配下にあり、大王からさらに各地の首長へ馬の配布が行なわれたという考えを応用するならば、信濃や上毛野においても有力首長が馬飼や牧を掌握して地域内の従属関係にある下位勢力の首長に馬を配布していたと考えることはできまいか。これらの地域には渡来系要素が他よりも顕著に見られることから、5世紀後半には馬の飼育に着手し、容易に入手、飼育ができない貴重な馬を統括することによって支配力を強化する一手段としたのであろう。

3. 北武蔵の古墳時代馬の存在意義

北武蔵地域において近年馬歯馬骨の出土を見た3遺跡とは、大宮台地の大宮市(伝)足立遠元館跡(埜埋文1990)、妻沼低地の岡部町砂田前遺跡(岩瀬1991)と深谷市城北遺跡(山川1991)であるが、これまで見てきた各地域の様相に照合させつつ、北武蔵の古墳時代馬の存在意義を考えてみたい。

(1) 大宮台地の古墳時代馬

(伝)足立遠元館跡は中世館の名を冠しているが、台地を開析して南流する鴨川右岸の自然堤防上に立地し、堤防から流路への緩斜面に広がる遺物包含部より数体分の馬骨が出土した。馬骨に直接伴う遺物はないが、周囲の土器出土状況から6世紀前半ごろの時期のものと考えられている⁽⁶⁾。流路との位置関係から、天理市布留遺跡(置田1979)等に見られるような祭祀的な性格をもつものと考えられるが、当時の馬の重要性を考えあわせると数体分の出土はこの遺跡の重要度も物語っているようである。この遺跡周辺では同じ鴨川流域の至近距離に浦和市白銀地区がある。白銀古墳群中の白銀塚山古墳には5世紀後半のB種横ハケを施す円筒埴輪が用いられており(山田・宮崎1989)、

白鍬遺跡及び隣接する与野市殿ノ前遺跡からは5世紀代の古式須恵器である壺、無蓋高坏、樽形甕が出土している（青木1966、大塚・坂本1959）。これらの遺物は現在のところ大宮台地においては他に例を見ず、それがこの地点に集中するという事は、既に宮崎由利江氏によって述べられているように（宮崎1991）この近辺に優位な力を持った首長が存在した可能性が強く、やや遅れて見られた（伝）足立館跡の馬の集中もこの首長の変遷の上にあるのであろう。ただ白鍬地区を中心とする大宮台地では、未だ数例を除いて顕著な渡来系要素が見当らず⁽⁷⁾、馬骨の時期の大型古墳も存在しないため河内、信濃、上毛野のように5世紀後半から馬飼を掌握したような首長層の存在した可能性は弱く、逆に有力首長から馬の配布を受ける側の下位首長だったのかもしれない。

（2）妻沼低地の古墳時代馬

妻沼低地は北側を利根川とその支流の小山川、西側から南側にかけてを櫛引台地、東側を荒川古流路の形成した砂礫層から成る荒川新扇状地によってそれぞれ画され、完結した地形となっている⁽⁸⁾。

砂田前遺跡は櫛引台地の崖線と、これに平行して東流する小山川に挟まれた妻沼低地最西端の自然堤防上に形成された集落跡である。道路幅の調査で、古墳時代後期の竪穴住居74軒のうち1軒から1頭分の馬下顎骨が出土した。他の土器とともに住居中央部の覆土中からの出土であるが、6世紀中葉のものと思われる。

城北遺跡は砂田前遺跡と同様、妻沼低地の自然堤防上に形成された集落跡である。道路幅の調査で古墳時代後期の竪穴住居が157軒検出され、そのうちの4軒から馬歯馬骨が出土した。いずれも覆



第4図 妻沼低地・古墳時代馬関連遺跡の分布

土中からの出土であるが、壁際に沿って多くの骨格が出土した11号住居以外の3軒では、住居中央寄りに馬歯が乱れた状態で出土した。集落の時期は数段階に分けられるが、この4軒は新しい段階で6世紀中葉のものと見られる。

さてこれらの2遺跡とも覆土中とはいえ竪穴住居内から馬歯馬骨の出土を見ている。同様の例は時代幅を広げれば、先に述べたように上毛野の三ツ寺II遺跡や中間地域、信濃の鑄師屋遺跡群に見られ、古墳時代のもは豪族居館との関係で、また奈良・平安時代のもは官牧、駅家、軍用馬徴用など公的な施設・用途との関連でその存在が解釈されているが、未だ少数例といえる。このような状況をもとに考えると、妻沼低地の2遺跡の馬歯馬骨もこの地域に馬に係わる施設があった結果として考えることはできないだろうか。この可能性を解明するために、前項で示した渡来系要素、有力首長との関連という2点が妻沼低地周辺で探求できるかどうか見ていきたい。

妻沼低地で発掘調査が頻繁に実施されるようになったのは最近のことであり、考古資料の整理分析はまだ十分に行なわれているとは言えない。現段階での所見としては、他地域で見られたような5世紀後半の韓式系土器は見られない。6世紀になると遺跡数、遺構数とも急激な増加を見せ開発が進んだことを示すが、遺物の中には城北遺跡出土の紐が付く大型の蓋形土師器⁽⁹⁾にその影響が見られる程度で、他に顕著な要素は見られない。一方、砂田前遺跡は後に榛澤郡に編入されるが、城北遺跡は幡羅郡に属する。幡羅建郡の経緯は同じ武蔵国の高麗・新羅両郡のように文献上には登場しないが、郡名より渡来人に関係する郡であるという指摘がこれまで成されてきた(森田1988)。この建郡説と関連させて、6世紀には渡来人の移入があったと考えることができるならば、城北遺跡の馬歯馬骨や蓋形土器を他地域と同等に置くことができるのではないだろうか。

城北遺跡周辺は6世紀から7世紀にかけて、馬歯馬骨を含めて馬に係わる考古資料(古墳出土の馬具と馬形埴輪を除く)が集中する地域でもある(第4図)。深谷市割山遺跡では埴輪窯跡群内の粘土採掘場覆土上層より馬形土製品が出土し、6世紀中葉のものと見られている(今泉他1981)。熊谷市西別府祭祀遺跡(埼玉県1984)と深谷市本郷前東遺跡(川口1989)からは滑石製の馬形品が出土しており、どちらも6世紀後半から7世紀前半のものと見られる。前者は段丘下の水源池への祭祀に用いられたもので、後者は自然堤防上のピット群に伴うものである。馬形石製品は全国的にも例が少なく上毛野地域では吉井町長根羽田倉遺跡がある(鹿沼1990)。西別府祭祀遺跡、本郷前東遺跡と同時期の祭祀跡からの出土であるが、この遺跡周辺は甘楽郡(後に多胡郡)韓級郷に比定されており、こも渡来人の地と関連づけることができる。さらに甘楽郡の鑄川を遡上すると6世紀前半の祭祀跡である富岡市久保遺跡が存在し(井上1987)、膨大な量の石製模造品のなかに馬歯(あるいは牛歯)を模したと思われる石製品が含まれることも注目に値する⁽¹⁰⁾。再び妻沼低地に目を向けると、深谷市東川端遺跡では8世紀前半の溝内から、6世紀前葉に製作され伝世の後に投棄されたと思われる馬鐸が出土している(瀧瀬1990)。瀧瀬氏は非実用的な威儀具としての伝世を考えているが、伝世期間を遡って6世紀前葉にこの地域に配布されたものだとすれば、後で見ると馬を通じての埼玉政権との関係が推察される。北武蔵では希有の存在である馬鐸だが、岡部町の出土と伝えられる同時期のものがこの地域にもう1点存在するのも興味深い。

次に妻沼低地の遺跡と有力首長との関連について考えてみたい。この地域には上毛野で見られた

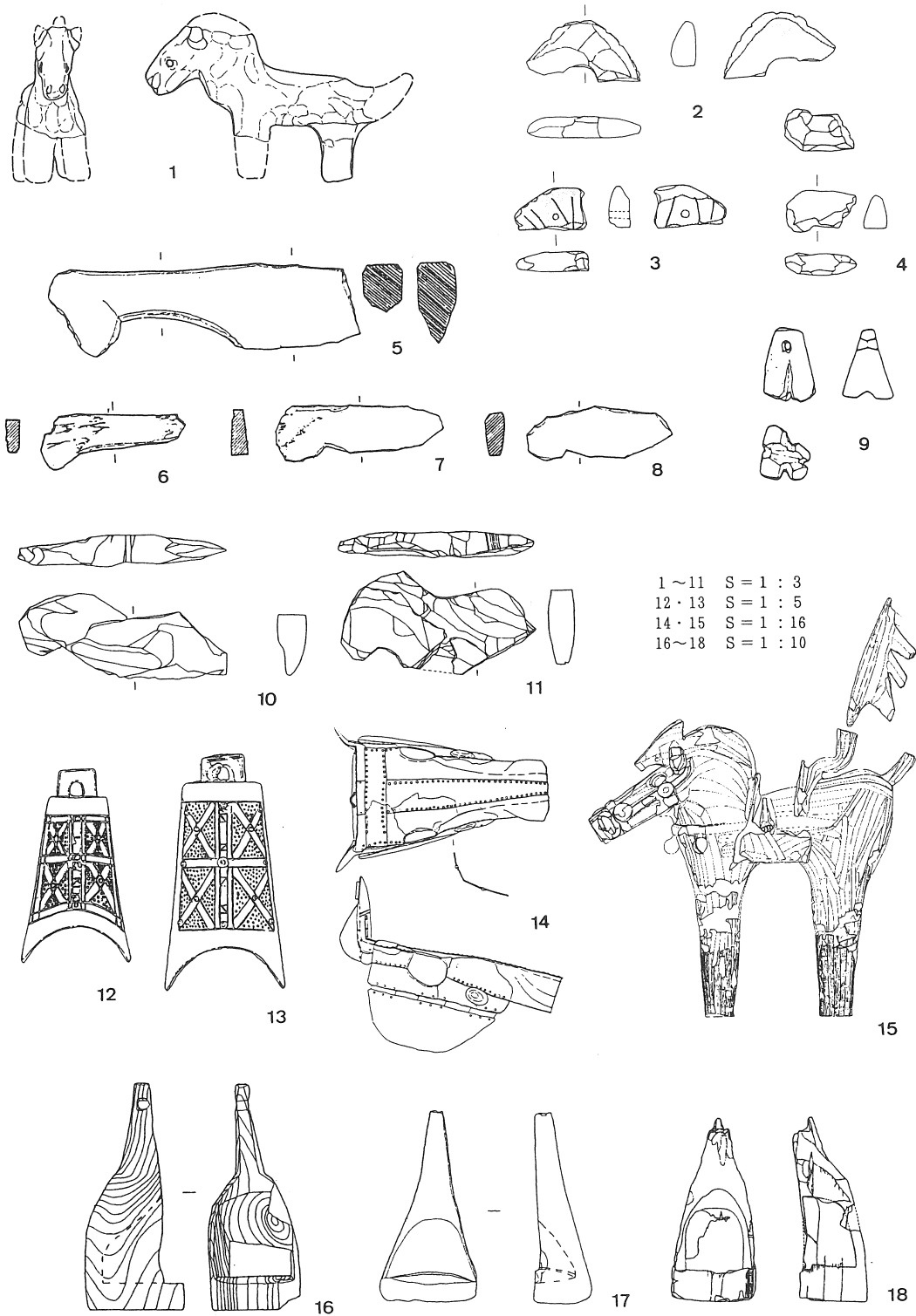
ような、馬齒馬骨出土遺跡に近接する大型古墳や豪族居館は知られていない。先に述べたような渡来系の人々の移住が首肯されるならば、その背景には畿内政権ないしは在地首長からの力が働いたはずであり、その力を埼玉政権にもとめたい。城北遺跡と埼玉古墳群とは直線距離にして約16km離れている。律令期には、それぞれが幡羅郡と埼玉郡に属するが、両郡の間には荒川新扇状地が存在し遺跡の空白地帯となって、両郡域の古墳時代の遺跡分布を分断している。この扇状地帯を越えて両地域を結ぶ交通路を想定するとき、そのひとつとして妻沼低地を西から東へ貫流する福川水系の河川交通をあげたい。福川は妻沼低地西部の砂田前遺跡付近に端を発し、本郷前東遺跡、東川端遺跡、城北遺跡の眼前を通過し、さらに10km東方で利根川と合流していく。この合流地点は、埼玉古墳群から北方へ約8km離れているが、ここには行田市酒巻古墳群が存在する。6世紀後半の酒巻14号墳の埴輪群中には、手のかくれる長袖上衣を着た男性埴輪、禪をしめた力士埴輪、旗を立てた馬形埴輪が存在し、いずれも朝鮮半島からの影響が指摘されている(塚田1991)。またこの馬形埴輪の旗を差し込む部分である蛇行状鉄器が同じく半島系の馬冑とともに埼玉古墳群の將軍山古墳から出土していることを考えあわせると、馬に係わる渡来系の要素と福川の交通を介して埼玉古墳群(埼玉政権)―酒巻14号墳―妻沼低地の諸遺跡というつながりを見出すことができるのである。

妻沼低地は位置的に見て、4～5世紀に北武蔵屈指の古墳築造地域であった児玉地域に接しているにもかかわらず、その時期に影響が及ばず、6世紀になって爆発的に集落数が増加し開発が進んだ。その背景には5世紀末より台頭してきた埼玉政権の介入が十分考えられ、渡来系の人々の移住も進められたのであろう。砂田前遺跡の西方台地上に所在する前方後円墳の寅稲荷古墳が、前方部の長い点から、同じプロポーションをもつ埼玉古墳群の勢力と結びついて台頭してきた新興の首長墓と考えられていることも(坂本1991)これを裏付ける要素となろう。

北武蔵の馬飼(馬匹管理)集団の在り方については、関義則氏が古墳副葬馬具の分布から言及している(関他1987)。論旨は概ね次のようなものになるうか。5世紀末から6世紀初頭かけてf字形鏡板付轡や楕円形鏡板付轡を伴うセットが出現し、前者は埼玉稲荷山古墳に見られるのに対して、後者は新たに台頭した勢力と見られる小地域の径30m程度の小円墳にある。本来のセットから離れて分与されたと思われる杉戸町目沼9号墳の雲珠と三鈴付杏葉や、埼玉古墳群に近い行田市大稲荷2号墳の馬具の入手経路などを考えあわせると、5世紀末に埼玉古墳群を中核とする在地首長層の再編が行なわれ、この関係構築に伴って馬具が配布された。6世紀第2四半期頃、環状鏡板付轡が畿内周辺に遅れて北武蔵に出現するが、前方後円墳や比較的大きな円墳など古墳群内の盟主墳あるいは首長墓に副葬が見られ、それ以外の小古墳にはほとんど見られない。7世紀に至ってはさらに馬具の出土は減少してしまう。以上のような馬具副葬の傾向から、北武蔵地域には5世紀末から6世紀初頭にかけて一時的に馬飼集団の導入が図られたにもかかわらず、6世紀以降は駿河、伊那谷周辺に計画的馬飼集団が建設されるのに反して、馬飼集団を養成すべき地域からは外されていった。その背景には畿内勢力が直属の騎馬部隊を編成するとともに、在地首長の軍事力を抑止する意図が

第5図の資料出土遺跡

1 割山遺跡 2～4 本郷前東遺跡 5～8 西別府祭祀遺跡 9 久保遺跡 10・11 長根羽田倉遺跡
12 東川端遺跡 13 伝岡部町 14 埼玉將軍山古墳 15 酒巻14号墳 16・17 池守遺跡 18 小敷田遺跡



第5図 古墳時代馬関連資料 (縮尺不同)

あった。そして7世紀以降の減少傾向は、その政策貫徹の結果であるという図式を導き出している。

さて、この関氏の論攷とこれまで述べてきた本稿の要旨との整合性を少し考えてみたい。まず5世紀末から6世紀初頭に北武蔵に導入されたとする馬飼集団の所在であるが、これは先に述べたように埼玉政権との関連の可能性から妻沼低地をあてることができよう。この時期の馬具が埼玉政権と在地首長たちとの関係で配布された点については、馬の希少性、軍事的重要性を考えるならば、中小勢力の在地首長個々の分担的な飼育管理ではなく、埼玉政権の独占的な管理のもとに他の在地首長は馬とともに馬具を配布される形をとった可能性が考えられる。東川端遺跡の馬鐸も本来はこうした経緯で妻沼低地に配布されたものかもしれない。そして問題の6世紀以降であるが、馬具の副葬される古墳が古墳群内の盟主・首長クラスの前方後円墳や大きめの円墳に変化しても、埼玉政権は依然として卓越した規模の古墳を築造しており、基本的には埼玉政権からの馬・馬具の配布は継続していたと思われる。仮にある程度の馬匹管理が各在地首長に委ねられたとしても、埼玉政権からの監察は当然なされていたであろう。砂田前遺跡、城北遺跡出土の馬はまさに6世紀代のものであり、この時期になっても依然、この地域で馬が飼われていたことを物語っている。この状況は、一見関氏の指摘した歴史的背景と矛盾するようだが、これはあくまでも馬飼集団の規模、程度の問題であり、畿内勢力に太刀打ちできないほど抑止された騎馬兵力であっても、武蔵において埼玉政権を維持するためにはある程度の騎馬兵力が必要であり、埼玉政権下では妻沼低地において継続した馬匹生産管理が行なわれていた証明となろう。行田市の池守遺跡(齊藤1981)や小敷田遺跡(吉田1991)からは、6世紀後葉の木製壺鐙が出土し、埼玉古墳群近辺における乗馬の風景を彷彿とさせてくれる。

以上のように、北武蔵の妻沼低地に見られる渡来系要素と埼玉政権からの影響力という2点からこの地域に馬飼集団が存在していたと考えたい。その活動が最盛となるのは6世紀中葉から後半と見られるが、萌芽は5世紀末まで遡る可能性もある。そして低地部における利根川をはじめとした河川の氾濫を考慮すると、実際の牧の設置場所は低地帯南側の櫛引台地上と考えたほうが合理的であろう。

4. まとめ——古代馬研究の現状

遺跡出土の馬歯馬骨をどう解釈するかにあたって、本稿では次のような立場をとってきた。つまり、遺構本体や出土状況などの性格を問わず、馬歯馬骨の出土事実は原則としてその地域に馬が存在していたことを意味するものであり、条件が整えばその周辺に馬飼集団や牧の存在が考えられる。そしてさらに、当時の馬の存在意義が軍事力あるいは政治力の象徴であると見るならば、その経営には有力首長の関与が十分に予想されるということである。この考えの基底となる諸氏の見解は、各地域ごとの概観の中で取り上げたが、本稿を草するにあたり古墳時代を含む古代馬の研究には次の大きな3つの傾向があると筆者なりに捉えている。

まず第1に、遺跡出土の馬歯馬骨が人間のいかなる行為の結果を表すものなのかということを追求する研究である。新井原4号土壇のように古墳周辺の土壇からの出土例は比較的多く、殉葬と見

られているが(藤崎1990)、従来、溝や井戸あるいは小土壇から馬歯馬骨が出土すると祭祀のための犠牲馬と考えられることが多く、土製・石製・木製の馬形品もその形代としてこの解釈に含められてきた⁽¹¹⁾。これに対し、松井章氏は出土状況や骨に残る解体痕の観察から新たな研究の側面を提示した(松井1987)。すなわち『養老厩牧令』などの「斃れ馬牛」に関する処理規定に、官の馬が死んだ場合には皮と脳を取り、公の任務途中で駄馬、伝馬が死んだ場合は皮と肉を売って代金を納めるという記述が見られ、このように死んだ馬の再利用の痕跡が遺跡出土の馬骨に見出せることを指摘した。さらに、割られた状態で出土した馬の頭骨は脳髓が摘出されたものであり、その脳髓は鹿皮をなめすのに用いられたという皮革技術にまで論は及んでいる。

第2は、馬に係わる遺物や遺構から、馬の存在の実態を追求する研究である。岡安氏や関氏は量的に多い馬具を使って、騎馬兵力や馬匹管理集団の動向を考察している。また、馬歯馬骨の直接的な出土を牧や豪族居館、官衙、駅などが存在した地域的特性の中でとらえ、馬飼集団の存在を検討するものとして、野島氏、堤氏、大江氏などの研究があるが、本稿は研究の傾向としてここに立脚するものである。一方、榛名山麓のFP下で検出された、渋川市中村遺跡での連続した長い代掻き痕のある水田跡や子持村黒井峯遺跡での集落内の家畜小屋跡、各地で出土している農耕具から山田昌久氏は6世紀後半には牛馬耕が行なわれていたことを説くとともに、古墳時代の牛馬の役割について軍用との関わりで考えられることが多いことに疑問を投じている(山田1989)。また、黒井峯遺跡に近い子持村白井遺跡群では、同時期の多数の馬蹄痕を残す遺構が検出され、輪換農法における放牧跡と見られている⁽¹²⁾。

第3は、遺跡出土の馬歯馬骨を形質学的に計測・分析して、年齢・体格等を復元し系統を追求する研究である。宮崎氏、大江氏、松井氏、などに加え西中川駿氏をはじめとする研究グループによって分析や集成が行なわれているが(西中川他1989, 1991)、これらの研究では時代背景に基づいた解釈がなされている点に学ぶべきものが多い。上毛野での宮崎氏や大江氏の見解は、専ら無機質の遺物、遺構を研究対象にしている考古学研究者には見出せないものである。

本稿は先に述べたような立場をとるが、上にあげた研究はいずれも傾聴に値するものであり、筆者は自分の立場以外の研究成果を軽視するものではない。むしろそれぞれの傾向や各氏の見解を合理的に繋ぐような良好な調査例や総合的な研究が少ないがゆえにそのような立場をとったといえる。たとえば、砂田前遺跡や城北遺跡のように堅穴住居が埋没していく過程で入りこんだ馬歯馬骨の解釈を試みると、遺存状態と観察視点が必ずしも十分でないことも相俟って、祭祀行為によるものなのか、解体行為によるものなのか判然としにくい。また集落内からの出土を見たことは、山田氏の牛馬耕説を補強するようにも考えられるが、古墳時代における騎馬と農耕馬との共用、別用の実態は依然として不明確な状況にある⁽¹³⁾。騎馬に使用した場合の軍事力の強化にしても、馬耕に使用した場合の能率化にしてもいずれも恩恵を被るのは権力者であり、そういう意味では各地域の馬飼を有力首長が掌握していたことは想像に難くないのである。

膨大な資料が集積されている人間の活動についてできえ、地域内、集落内、住居内の総合的な考察をするのは難しい。これに比べれば、はるかに資料数の少ない古代馬のことについて総合的な判断を下すのは、さらに困難であるのは当然のことといえようか。

本稿を草するにあたり、次の方々から御指導、御教示を頂きましたが、その内容を十分に生かせなかつたことを反省しつつ、ここに記して感謝の意を表したいと思います。(敬)

石神幸子、井上 太、岩瀬 譲、笠井敏光、鹿沼栄輔、川口 潤、神澤昌二郎、小林正春、小林義孝、坂本和俊、佐藤信之、高野 学、田口一郎、田中広明、堤 隆、西中川 駿、野島 稔、馬場保之、福田 聖、松井 章、宮崎重雄、宮瀧由紀子、桃崎祐輔、矢島宏雄
本稿は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の平成2年度研究助成の成果である。

(1992年4月)

註

- (1) 直良論文(直良1984)などに数例が取り上げられているが、出土状況の不明瞭なものが多く、否定的な見解も出されている(松井1990)。
- (2) 特に、縄文・弥生時代の馬の存在をどう捉えるかが大きな問題となる。出土状況の詳細な検討が必要となるが、本稿の主旨とは別の次元にある問題なので言及しない。
- (3) 西中川駿氏をはじめとする鹿児島大学研究班の集成(西中川他1989・1991)に依るところが大きい。全国的に網羅された各資料の所属時期はやや大づかみだが、全国の傾向がつかめる労作である。
- (4) 大阪府立泉北考古資料館における1990年の特別展「馬と古代社会―河内馬飼とその周辺」の展示解説による。
- (5) 飯田市教育委員会の小林正春、馬場保之両氏の御厚意によって新井原12号墳、4号土壇と合わせて出土遺物を実見させていただいた。
- (6) 未報告であるが、調査担当者の宮瀧由紀子氏から御教示をいただいた。
- (7) 殿ノ前遺跡の無蓋高坏を舶載品とする見方があるほか、大宮市御蔵台遺跡(山口・宮崎1990)では5世紀中葉の2号住居から、陶質土器の大甕の特徴である肩部小突起のある土師器の壺が出土しているが水系が異なる。
- (8) 地形分類上、「妻沼低地」は本文で示した地域のさらに東方に続いて、行田市東縁部まで広がる。本稿では煩雑さを避けるため、この中央部にある荒川新扇状地以西、すなわち妻沼低地西半部を「妻沼低地」と表して論をすすめることにする。
- (9) 1990年12月の現地説明会にて展示公開された。坂本和俊氏により韓式系土器との関係が指摘されている(坂本1991)。
- (10) 1990年、群馬県土器観会による久保遺跡の資料見学会の際、坂本和俊氏、田口一郎氏によってその可能性が指摘された。大江直直氏の考察の中で、井戸等の祭祀にあたる者が、事前に死んだ馬から馬歯を採取しておいて、これを犠牲馬の代用としたり、あるいは馬の歯が馬の恐ろしさや、威力を代表するものとして選ばれたのではないかとする説(大江1990)と共通する要素であり興味深い。
- (11) 犠牲馬を扱ったもので、溝や井戸に関するものでは土井孝氏(土井1983)、小土壇に関するものでは水野正好氏(水野1983)の論考があげられる。
- (12) 朝日新聞1991年7月15日の夕刊記事による。
- (13) 山田氏の取り上げた中村遺跡の代掻き痕や黒井峯遺跡の家畜小屋跡などが、当時の他集落、他地域にどれくらいの普遍性をもつか、すなわち馬がどれくらい一般集落に入りこんでいたかが大きな問題点となろう。

引用・参考文献

- 青木義脩 1966 「浦和市白楸発見の須恵器と土師器」『埼玉考古』第4号 P16～18
井上 太 1987 「久保遺跡」『富岡市史』原始・古代・中世編 富岡市
今泉泰之他 1981 『割山遺跡』深谷市割山遺跡調査会
岩瀬 譲 1991 『樋詰・砂田前』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 大江正直他 1990 「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺体」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大江正直 1991 「三ツ寺II遺跡出土の獣歯・獣骨について」『三ツ寺II遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 大塚初重 1986 『東国の古墳文化』六興出版
- 大塚初重・坂本明美 1959 「埼玉県白楸遺跡の須恵器」『駿台史学』第9号
- 岡安光彦 1986 「馬具副葬古墳と東国舍人」『考古学雑誌』第71巻第4号 P54～76
- 置田雅昭 1979 『布留遺跡範囲確認調査報告書』天理市教育委員会
- 乙益重隆 1985 「馬の随葬例について」『古城横穴墓群』熊本県教育委員会
- 川口 潤 1989 『本郷前東遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鹿沼栄輔 1990 『長根羽田倉遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 木津博明 1988 「第3章第1節 周辺遺跡」『上野国分僧寺・尼寺中間地域』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 木津博明他 1990 『上野国分僧寺・尼寺中間地域（4）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 木下 亘 1985 「更埴市域の内遺跡出土の陶質土器について」『信濃』第37巻第4号 P170～183
- 桐原 健 1989 『積石塚と渡来人』東京大学出版会
- 小林正春・今村善興 1983 「新井原12号古墳」『長野県史』考古資料編第1巻（3） 長野県
- 埼玉県 1984 「西別府祭祀遺跡」『新編埼玉県史』資料編3
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報』10
- 齊藤国夫 1981 『池守遺跡』行田市教育委員会
- 佐伯有清 1974 「馬の伝承と馬飼の成立」『日本古代文化の研究 馬』社会思想社
- 坂本和俊 1991 「榛澤郡の成立前夜」『公開シンポジウム「中宿遺跡」を考える』北武蔵古代文化研究会他
- 佐藤信之 1989 『生仁遺跡III』更埴市教育委員会
- 下伊那教育会 1991 『下伊那史』第1巻考古編
- 下城 正他 1988 『三ツ寺I遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 瀬川芳則 1991 「馬飼集団の神まつり」『古墳時代の研究』3 雄山閣
- 関 晴彦他 1991 『三ツ寺II遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関 義則・宮代栄一 1987 「県内出土の古墳時代の馬具」『埼玉県立博物館紀要』14 P3～55
- 瀧瀬芳之 1990 『東川端遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田口一郎 1988 『海行A・B遺跡』箕郷町教育委員会
- 塚田良道 1991 『海を渡ってきた文化』展示図録 行田市立郷土博物館
- 堤 隆 1989 『根岸遺跡』御代田町教育委員会
- 鳥羽政之 1991 「中宿遺跡とその周辺」『公開シンポジウム「中宿遺跡」を考える』北武蔵古代文化研究会他
- 土井 孝 1983 「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集
- 直良信夫 1984 『日本馬の考古学的研究』日本中央競馬会
- 中島洋一他 1988 『酒巻古墳群』行田市教育委員会
- 西中川駿他 1989 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究』鹿児島大学農学部
- 西中川駿他 1991 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』鹿児島大学農学部
- 野島 稔 1980 『清滝古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会
- 野島 稔 1981 『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会
- 野島 稔 1984 「河内の馬飼」『万葉集の考古学』筑摩書房
- 野島 稔 1986 『中野遺跡発掘調査概要III』四條畷市教育委員会

- 野島 稔 1988 『中野遺跡発掘調査概要Ⅴ』四條畷市教育委員会
- 藤崎芳之 1990 『佐倉市大作遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 松井 章 1987 「養老厩牧令の考古学的考察」『信濃』第39巻第4号 P231~256
- 松井 章 1990 「動物遺存体から見た馬の起源と普及」『日本馬具大鑑』1 日本中央競馬会
- 松井 章 1991 「家畜と牧一馬の生産」『古墳時代の研究』4 雄山閣
- 水野正好 1983 「馬・馬・馬—その語りの考古学」『文化財学報』第2集 P23~43 奈良大学文学部文化財学科
- 宮崎重雄 1988 「三ツ寺 I 遺跡出土の獣骨類について」『三ツ寺 I 遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 宮崎重雄 1989 「鑄師屋遺跡群出土の馬歯・馬骨と獣骨類について」『根岸遺跡』御代田町教育委員会
- 宮崎由利江 1991 「まとめ」『市内遺跡群発掘調査報告C-1号遺跡』大宮市教育委員会
- 森田 悌 1988 「幡羅郡の開発」『古代の武蔵』吉川弘文館
- 山川守男 1991 「埼玉県深谷市城北遺跡」『日本考古学年報』42 日本考古学協会
- 山口 明 1989 『信濃の馬』長野市立博物館第24回特別展図録
- 山口康行・宮崎由利江 1990 『御蔵台遺跡発掘調査報告』大宮市教育委員会
- 山田尚友・宮崎由利江 1989 『白楸宮腰遺跡発掘調査報告書(第2次)』浦和市遺跡調査会
- 山田昌久 1989 「日本における古墳時代牛馬耕開始説再論」『歴史人類』第17号 P175~202 筑波大学歴史人類学系
- 山根洋子他 1987 『土口將軍塚古墳』更埴市・長野市教育委員会
- 矢島宏雄 1978 「馬骨を出土した更埴市五輪堂遺跡」『長野県考古学会誌』31 P52
- 吉川敏子 1991 「古代国家における馬の利用と牧の変遷」『史林』第74号第4号 P24~61
- 吉田 稔 1991 『小敷田遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研究紀要 第9号

1992

平成4年10月23日 印刷

平成4年10月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 望月印刷株式会社